

場の設計 (I)

野口晋哉

場とは何か

あんまりかしまって話すのは性に合わないので、少しざっくりばらんにお話しさせていただくと、僕たちには三つの選択肢があったんですね。一つは、どういう状態になろうと、今まで通り整体協会の中で我々の活動をするという現状維持の選択。もう一つは、組織なんかクソくらえだと、俺は個人でやって、個人事業主として整体をやっていくという選択。それからもう一つが、今回我々が選んだ、共鳴する人たちと共に新しい団体を作って活動していくという選択。これを僕たちは選択した。

こういうことはね、多分外から見ると、喧嘩したんじゃないの？とか、整体に対する考え方とか、もしくは手法に対する考え方とか、技術に対する考え方など、こういうことの違いから、整体協会と分かれて、新しい団体を作っていくというふうに見えるかもしれない。ただ、それらのことは、僕たちにとって、取るに足らない些細なことなんで、あんまり関係ないんですよ。というのも整体というのは、一人先生がいればその方の流儀がやっぱりあるので、基本的に一人一流派として存在しているわけです。ですので、例えばダン先生と僕がいたとして、ダン先生の考える整体と僕の考える整体は違うかもしれない。もしくは手法も違うかもしれない。でもそれでいいんですよ。そういうことは当たり前なんです、我々にとっては。でも、そういう部分を抜きにしてもね、今回どうしても僕たちは独立しなければいけなかったと思う。というのも不思議とね、僕やダン先生、順哉さんと菊地君、もしくは身体教育研究所の仲間たちは、基本的には一人一流派ですから、整体に対する考え方とか個人個人で違いますけれども、一つだけ共有して信じていることがあるんです。それは「場」というものがどれだけの力を持っているかということ。僕たちは信じているんです。

それでいつも僕は思うのですよ。野口晴哉という人はどうして、単なる偉人と

して自分の人生を終えなかったのか。なぜ自分の全財産をなげうってまで、瀬田に本部道場を建てたのか。もしくはこういう考え方というのは野口昭子にもあるわけですね。なぜ平安時代から続く近衛家の大事な土地を整体協会に託したのか。もしくはこれはダン先生にも、ロイ先生にもある考え方で、なぜ彼らは自分の収入の半分近くを整体協会に渡していたのか。なんでロイ先生は二十二日の指導者の会に、非専門家である一般会員の方を交えて整体を学んでいこうとしたのか。もしくは、なんでダン先生は「活元運動」「愉気」それから「錐体外路系の訓練」という言葉、つまり専門的な用語から離れ、「触れ」「動き」そして「他者と出会う」という一般的な言葉に置き換えて整体を説明していったのか。

これってね、一つ共有していることがあるんですよ。それはね、彼らには社会を作りたいという気持ちがあるんですよ。このことはね、僕たちも共有しているんです。その社会というのがやっぱり「場」なんだ。

場には道が隠れている

「場」という言葉があまりピンとこなかったら、それは別に共同体でもいいし、ある種の社会でもいいです。そういうふう理解してもらえばいい。でも、僕たちが作ろうとしている場というのは、From the bottom upとか、風通しよく民主的に、透明性をもって公益性を担保して、なんて話じゃない。

俺たちは違う。俺たちが考える「場」は、「晴風」という概念がど真ん中にあるって、そのど真ん中の周りは全て余白である。その余白に誰もが参加できれば、その中心に自分の人生を結びつけることができるって、そういう場を僕たちは作っていききたいんです。何故ならば「場」には「道」が隠れてるから。普段見えない道が、ある時ある瞬間に見えるようになってる。それがどんな角度からでもいいんですよ。花であろうと書であろうと、音であろうと。内観でもいいし邪気を吐くことでもいいの。どんな角度から入っても、そこに隠れている道が顕になれば、それはど真ん中に位置する晴風に繋がってる。そういうものを「場」であると、そう考えているんです。

場を作る際の問題

その時に、場を作っていこうとする時に、障害になることが一つあって、それ

はどういう障害かというのと、専門家という障害なんですよ。専門家ってさ、考えることすごい単純なんですよ。どういうふうに考えるかというのと、専門家って、「専門家が強くなれば非専門家も強くなるはずだ」と思い込んでいるんですね。わかるかな。だから、何よりもまず最初に「専門家が強くなければならないのだ」というところからスタートする。これ、僕よくわかるんだよ。なぜかというのと、僕も専門家の端くれですからね、ちょっと間違えるとそういう方向に行きがちだということはよくわかっている。

試しに専門家を捕まえて聞いてみればいい。「あなたたちはどういう整体を考えているんですか」、「どういう方向性に組織を持っていきたいんですか?」ってね。おそらく出てくる言葉というのは、専門家による専門家のための、専門的な整体のこと、それをいかにエンパワーするべきか、という話以上は出てこないと思うよ。体制転覆して膿を除去したんで公益性と民主制を大切にしていきますとか、今までの整体は効かない整体だったので、医療と連携して効く整体をやっていきますとか、内観とか動法とか感覚運動とか、なんだかよくわかんないことを言っているから、再現性のある科学的なものに整体をしていきますとかね。別にいいんですよ、それは。専門家としての信念なんだから。でも頭の中が無意識に特権階級だから、自分たちが強くなれば、自分たちが考えることが元氣になれば、あなた方も元氣になるでしょう、非会員の方だって、非専門家だって元氣になるでしょうという発想なわけだ。つまりどういう「場」にしていくかということとがすっぱり抜けて、専門家中心主義に偏っている。僕からするとこれは晴哉の思い描いていた「場」のあり方とは真逆だと思えないんです。

こんなんでもいいの?と僕は思うんだよ。野口晴哉と野口昭子、彼らは専門家を養成するためだけに本部道場を建てたんですか? 京都研修会館を託したんですか? この状態を野口晴哉が見たら何て言うかって想像できるじゃないですか。あれだけ彼は生前、専門家が技術を習得して、自分たちが何か力を得たみたいな万能感あふれる姿で彼の目の前に現れたら、お前全然分かってないよと、散々ちゃぶ台ひっくり返してきたわけじゃないですか。

俺たちは違うの。俺たちはこう考えるのね。俺達は、専門家も非専門家も、「場」が豊かになれば、みんな元氣になるんだって、だから何よりもまず「場」を豊かにしていかななくてはならない。そう信じているんです。

次に繋げていくべき場を求めて

今の順哉君の説明を聞いてみると、いろいろ細かいことはあるんだけど、でも、場というのは、やっぱり相当設計していかないと、意識的に設計していかないよね、やっぱり立ち上がっていかないですよ。順哉君とか菊池君みたいな、こういう意識のある人たちが、ちゃんと組織を引っ張っていかなきゃいけないわけ。そういう強い意志を持ってね。

つまり、このような「場」に対する理念と信念の違いというのが、今回の新しい団体の設立につながったということだから、最初に言ったような些細な話はどうでもいいことなんです。僕たちはさ、決断したのよ。身近なところでいえば、これ僕の子供にも僕の孫にも影響する話だからね。今後整体協会と一切関わっていかなくなるわけだから。でもね、もし俺たちが考える野口晴哉の整体から、人生と道が切り離されて、技術や方法論という専門的な側面だけから整体が語られたら、それさ、カイロプラティックやキネシオロジーとなんの違いがあるんですか？ そんな整体になんの価値があるんですか？ 僕はそんな整体には自分の子孫を関わらせるつもりは全くありません。

なので、やっぱりきちんとこういうことを「場」として残していきなりたいなっていうふうに思っているわけです。しかし、だからといってね、晴風学舎に皆さん来てください！ とは言っていないんですよ。そういうのはもうほんとどうぞご自由にしてください。共鳴するものがあつたら来ればいいし、ないなら無視してください。僕たちは誰に対してもオープンにしていますから。そういうことだと思いません。整体協会の会員の方が今日どれだけいらっしゃるのか、僕は存じ上げないけれど、少なくとも、朝からここにいらっしゃっている、この場に来てくださった皆さんにはね、ちょっと誤解なきよう、我々が何を考えているのかということをお話をちょっとご説明したかったなと思って、お話をさせていただきました。